

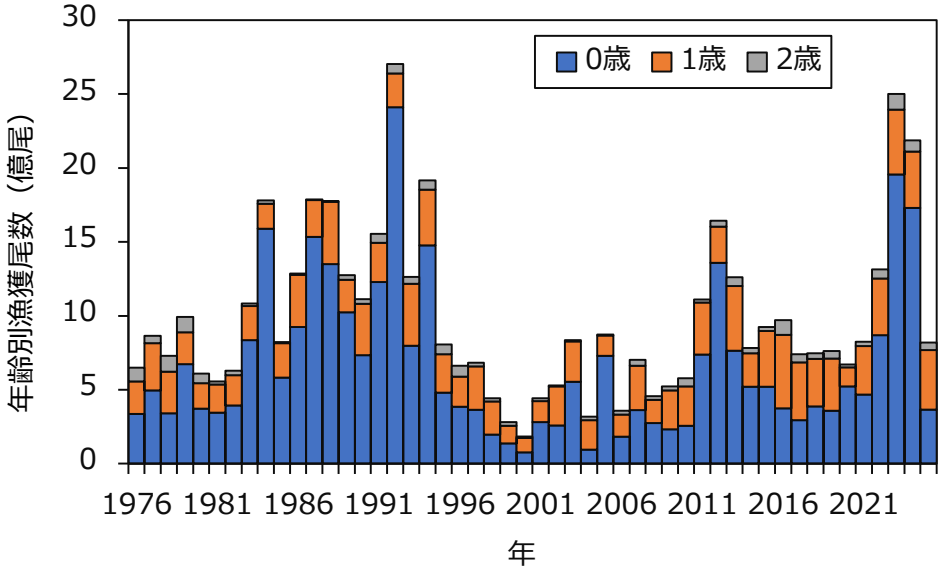
# ウルメイワシ（対馬暖流系群）①

ウルメイワシは日本の沿岸域を中心に分布し、特に本州中部以南に多い。本系群はこのうち日本海から九州西岸に分布する群である。




**図1　分布域**

日本海から九州西岸にかけて分布し、沿岸域での分布が多い。



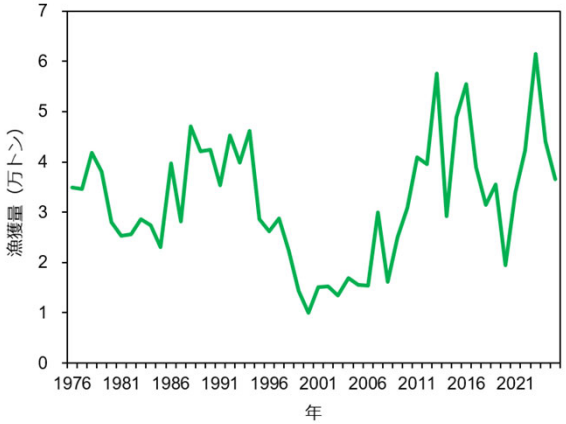




**図2　漁獲量の推移**

漁獲量は、1990年代後半から2000年にかけて1.0万トンまで減少したが、2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5.0万トンを超えた。その後漁獲量は減少し、2020年は1.9万トンと大きく減少したが、2021年以降は増加し、2023年は6.1万トンとなった。2024年以降は減少し、2025年は3.7万トンであった。

**図3　年齢別漁獲尾数の推移**

漁獲物の年齢組成を尾数でみると、0歳魚（青）、1歳魚（橙）が主体で、2歳魚が占める割合は少ない。

# ウルメイワシ（対馬暖流系群）②

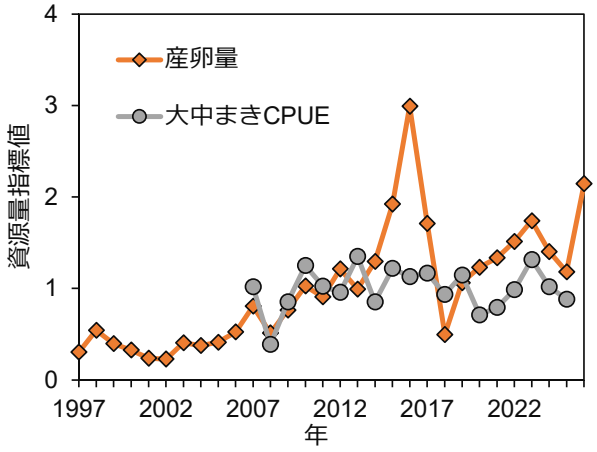



**図4　資源量指標値**

産卵量および大中型まき網の標準化CPUEを用いた。2025年はいずれの指標値も2024年からやや減少したが、2026年の産卵量は高い水準だった。なお、各指標値は全期間の平均値が1になるよう規格化した。

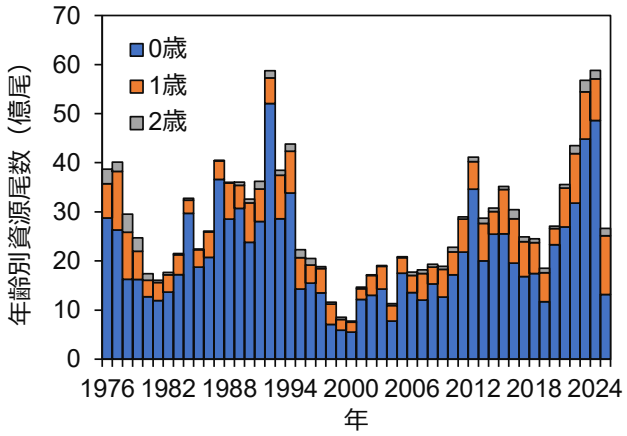



**図5　年齢別資源尾数**

資源の年齢組成を尾数でみると、0歳魚（加入量：青）を中心に構成されており、その数は2025年に急減した。

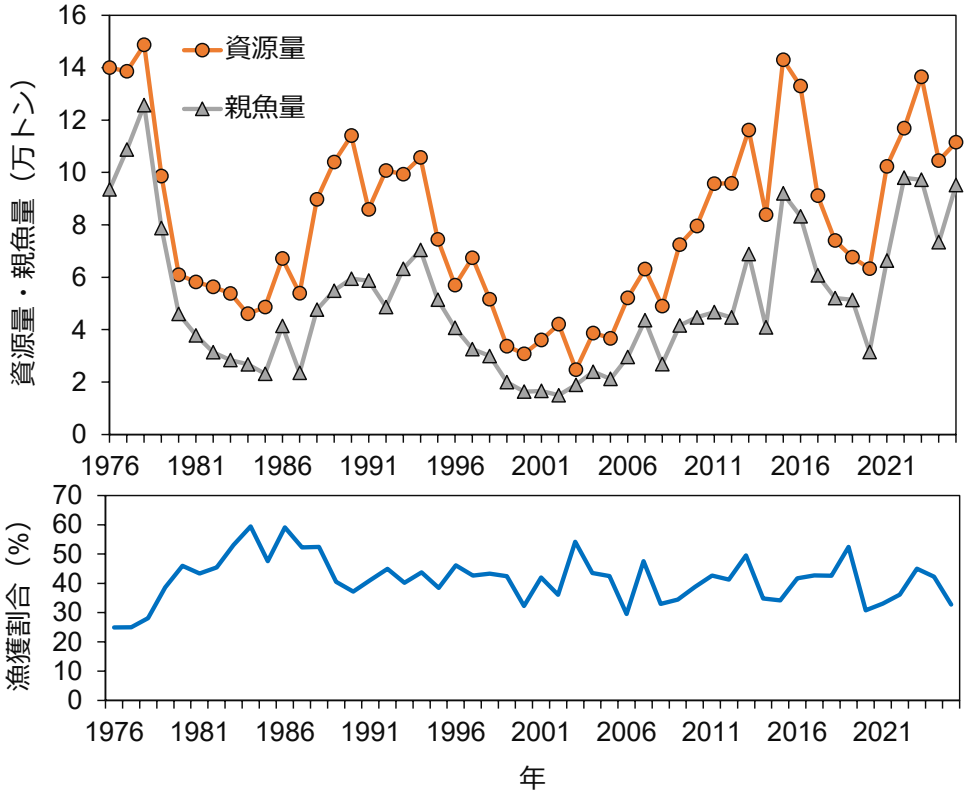



**図6　資源量・親魚量・漁獲割合（%）**

資源量は2021年以降増加して2025年は11.2万トンと推定された。親魚量は直近5年間（2021～2025年）でみると横ばいで、2025年には9.5万トンであった。

漁獲割合は50%を超える高い水準の年も出現しており、変動が大きい。2021～2025年において、33～45%で推移した。

# ウルメイワシ（対馬暖流系群）③

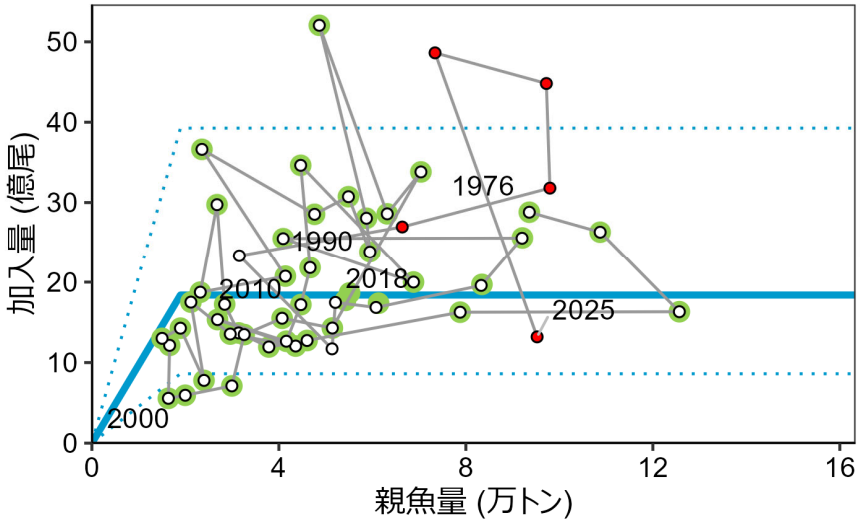



**図7　再生産関係**

1976～2018年の親魚量と加入量に対し、加入量の変動傾向を考慮したホッケー・スティック型再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で加入量の90%が含まれると期待される範囲である。

緑丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2026年度資源評価で更新された観測値、赤丸は直近5年間（2021～2025年）の観測値である。

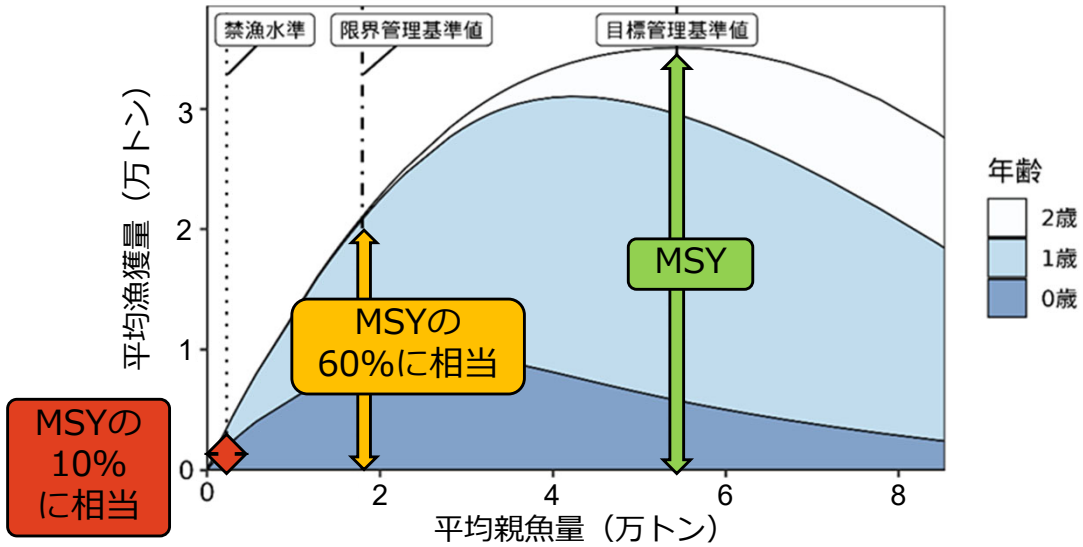



**図8　管理基準値**

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は5.4万トンと算定される。目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

| 目標管理基準値 | 限界管理基準値 | 禁漁水準 | 2025年の親魚量 | MSY | 2025年の漁獲量 |
|---|---|---|---|---|---|
| 5.4万トン | 1.8万トン | 0.2万トン | 9.5万トン | 3.5万トン | 3.7万トン |

# ウルメイワシ（対馬暖流系群）④

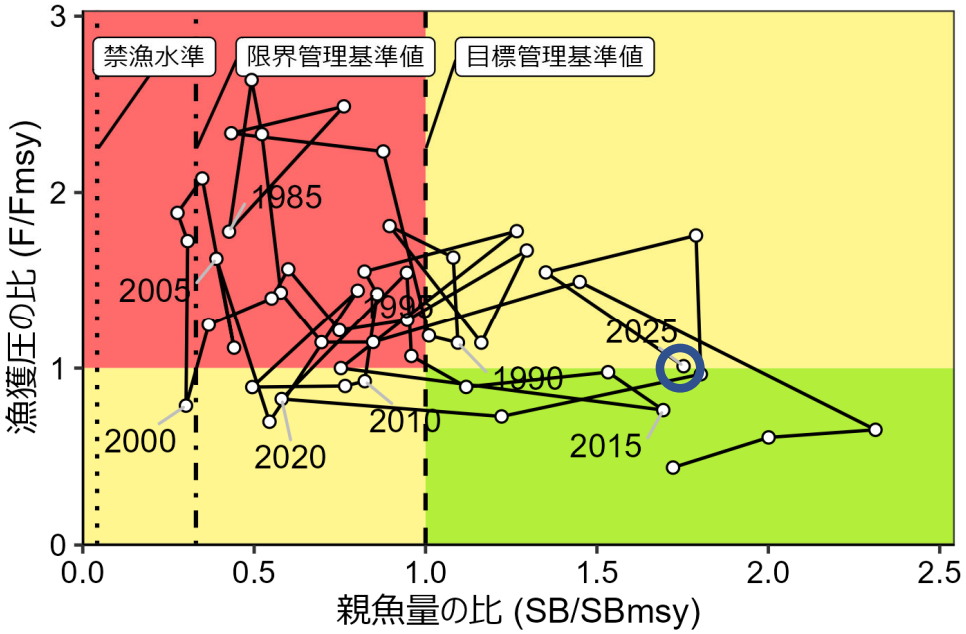



**図9　神戸プロット（神戸チャート）**

2025年の親魚量（SB）は、最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を上回り、SBmsyの1.75倍であった。

2025年の漁獲圧（F）は、SBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）を上回り、Fmsyの1.01倍であった。

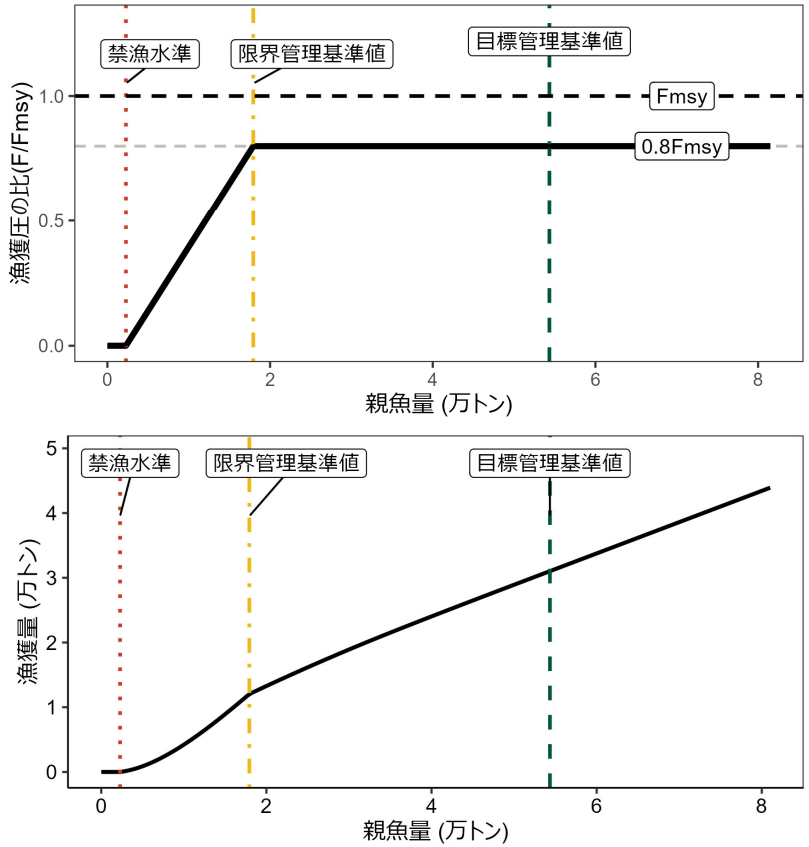
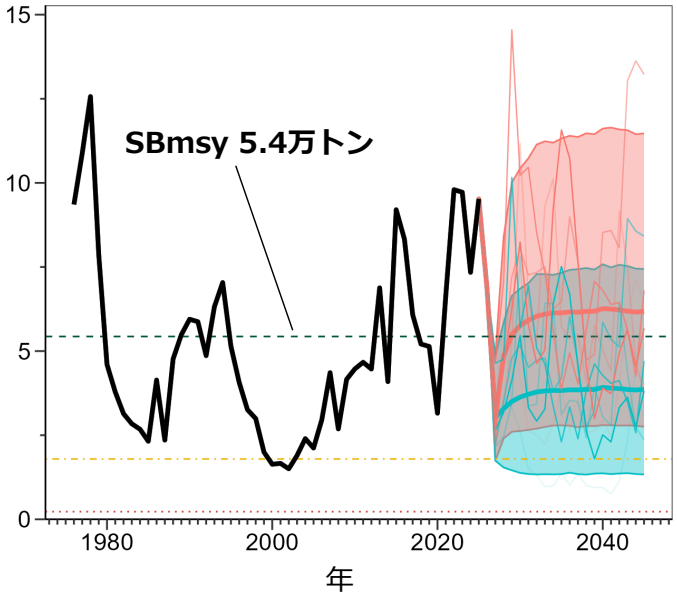



**図10　漁獲シナリオ（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）**

漁獲シナリオ（β=0.8）を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

# ウルメイワシ（対馬暖流系群）⑤

## 将来の親魚量（万トン）




## 将来の漁獲量（万トン）

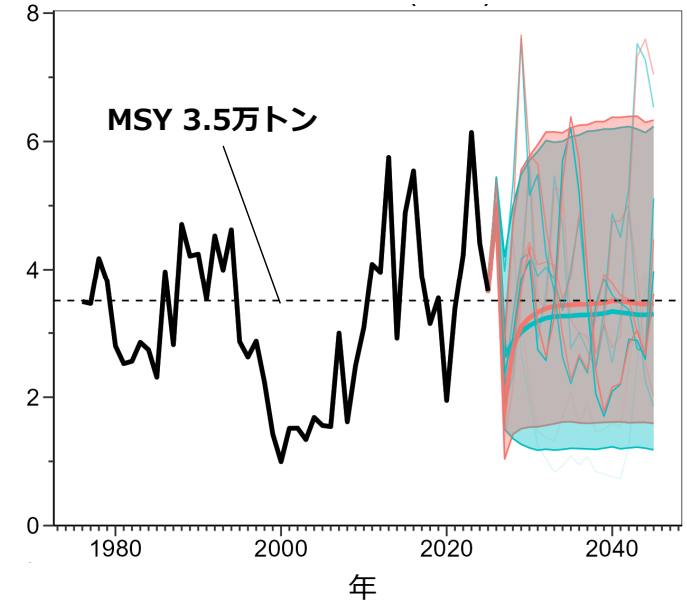



**図11　漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）**

漁獲シナリオ（β=0.8）に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

親魚量の平均値はSBmsyを上回る水準で、漁獲量の平均値はMSY水準で推移する。

漁獲シナリオに基づく将来予測（β=0.8）

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

MSY

目標管理基準値

限界管理基準値

禁漁水準

# ウルメイワシ（対馬暖流系群）⑥

**表1. 将来の平均親魚量（万トン）**

| | | | | | | | | | | 2034年に親魚量が目標管理基準値（5.4万トン）を上回る確率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| β | 2026 | 2027 | 2028 | 2029 | 2030 | 2031 | 2032 | 2033 | 2034 | |
| 1.0 | 6.8 | | 4.4 | 4.9 | 5.1 | 5.2 | 5.3 | 5.4 | 5.4 | 41% |
| 0.9 | | | 4.6 | 5.2 | 5.4 | 5.5 | 5.7 | 5.7 | 5.7 | 47% |
| 0.8 | | 3.0 | 4.8 | 5.5 | 5.8 | 5.9 | 6.0 | 6.1 | 6.1 | 53% |
| 0.7 | | | 5.1 | 5.9 | 6.2 | 6.3 | 6.5 | 6.5 | 6.6 | 60% |
| 現状の漁獲圧 | | | 3.3 | 3.5 | 3.6 | 3.7 | 3.8 | 3.8 | 3.8 | 16% |

**表2. 将来の平均漁獲量（万トン）**

| β | 2026 | 2027 | 2028 | 2029 | 2030 | 2031 | 2032 | 2033 | 2034 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1.0 | 5.0 | 2.1 | 2.9 | 3.2 | 3.3 | 3.4 | 3.4 | 3.5 | 3.5 |
| 0.9 | | 2.0 | 2.8 | 3.1 | 3.3 | 3.4 | 3.4 | 3.5 | 3.5 |
| 0.8 | | 1.9 | 2.8 | 3.1 | 3.2 | 3.3 | 3.4 | 3.4 | 3.4 |
| 0.7 | | 1.7 | 2.7 | 3.0 | 3.2 | 3.3 | 3.3 | 3.4 | 3.4 |
| 現状の漁獲圧 | | 2.6 | 2.9 | 3.0 | 3.1 | 3.2 | 3.2 | 3.3 | 3.3 |

漁獲シナリオ（β=0.8、赤枠）に基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。2026年の漁獲量は、現状の漁獲圧（2023～2025年の平均：β=1.62相当）から予測される5.0万トンと仮定した。

この漁獲シナリオに従うと、2027年の平均漁獲量は1.9万トン、2034年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は53%と予測される。併せて、βを0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

**表3. ABC要約表**

| 2027年のABC（万トン） | 2027年の親魚量予測平均値（万トン） | 現状の漁獲圧に対する比（F/F2023-2025） | 2027年の漁獲割合（%） |
|---|---|---|---|
| 1.9 | 3.0 | 0.49 | 34 |

注：表の値は今後の資源評価により更新される。

# 前年度（2025年度）評価結果からの変化とその要因（ウルメイワシ対馬暖流系群）

**ポイント**
- 2025年は、1歳以上の漁獲尾数に大きな変化はみられなかった一方、0歳魚の漁獲尾数は2023年及び2024年を下回った（図1）
- 2025年の漁況を評価に反映させた結果、2025年の加入量は前年度評価における予測よりも大幅に低い値となった（図2）
- 過去の加入量の変動パターンから※1、2026年以降の加入量も低い水準で推移すると見込まれ、2027年の予測漁獲量は前年度評価よりも大幅に低い値となった（図2、2027年の平均漁獲量：5.2万トン→1.9万トン※2 ）
- 2026年以降の予測親魚量も、前年度評価よりも低い値となり、2027年には98%の確率で目標管理基準値を下回ると予測された（図2、2027年の平均親魚量：9.6万トン→3.0万トン、目標管理基準値：5.4万トン）

※1 本系群については、ある年の加入量が高ければ（低ければ）、その翌年の加入量も高くなる（低くなる）傾向が認められる
※2 2027年のABC

**その他の留意点**
- 資源量指標値※3のうち、産卵量については、近年では高い値を示す直近2026年データまで含めた指標値に変更（図3）
- これら資源量指標値の変更も、前年度評価結果からの変化に影響
- 対馬暖流域におけるマイワシ・マサバの増加とカタクチイワシの減少に伴う漁業形態の変化により、混獲物となるウルメイワシの漁獲実態が変化している可能性があるが、このような漁業実態の変化が資源評価結果に与える影響は十分に把握できておらず、近年の資源評価における不確実性が増大している可能性がある
- 特に、直近年の加入量（本年度評価では2025年の加入量）については不確実性が高いと考えられる

※3 資源量指標値：資源量や親魚量などを反映していると考えられる指標

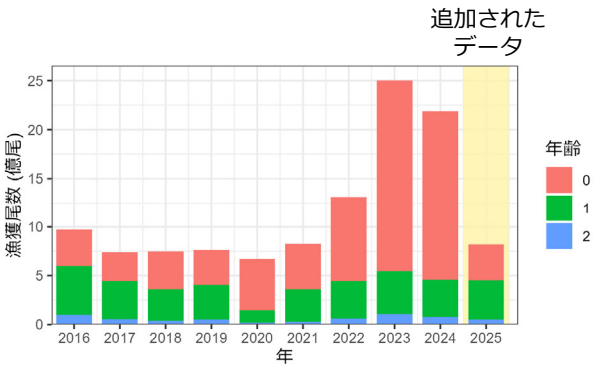



図１　年齢別漁獲尾数

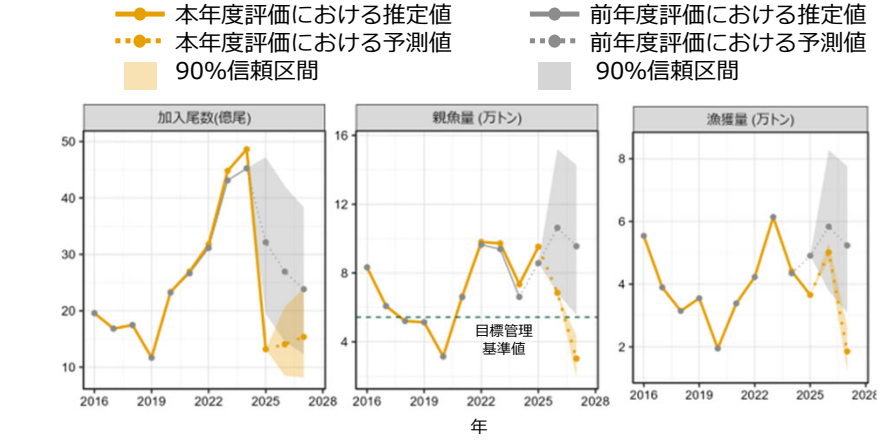



図2　本年度（2026年度）と前年度（2025年度）の評価結果

2027年のABC：本年度評価における2027年の平均漁獲量
2026年のABC：前年度評価における2026年の平均漁獲量
前年度評価における2025年の漁獲量は過去３年間（2022～2024年）の平均漁獲量、
本年度評価における2026年の漁獲量は近年の平均的な漁獲圧を基に算出
前年度評価における2026年以降の漁獲量および本年度評価における2027年の漁獲量は漁獲シナリオに基づき算出

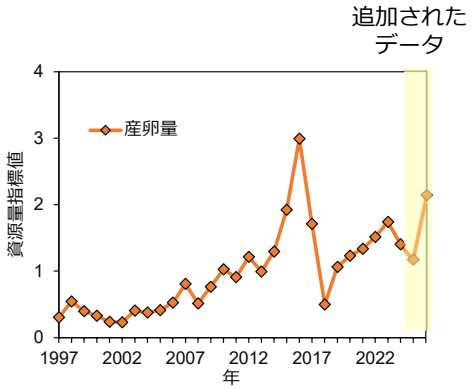



図3　産卵量

縦軸は平均が1となるように規格化した値